

私にとっての税

大川市立大川桐英中学校 3年 田毎 綾花

「いってきます。」

制服姿の女の子がそうやってドアを開ける。彼女が歩く道路はゴミであふれ、信号機がない。整備されずボコボコとしたコンクリートにつまずき、バックから荷物が出る。荷物を拾っているときに気づく。入ってたはずの財布がない。だけど彼女は警察を呼ばない。いや、呼べなかったのだろう。そんな彼女は、とても暗い顔をしていた。

「このように税のない世界は不便なことばかりなんです。」

小学六年生の私は、税について学ぶ授業でこんなビデオを観た。でも、三年前の私にはあまりにも非現実な世界で税の大切さがあまり分からなかった。しかし、あることをきっかけに、税について考えるようになった。それは、祖父の入院だった。

二年前、祖父は持病により突然倒れた。幸い容体は安定し、私は祖父のお見舞に行った。久しぶりに祖父に会えた私は、学校の話や部活の話など、沢山の話をした。その時に祖父が言った

「税金には感謝せないかな。」

私はあまりピンとこなかった。なぜなら、ニュースで増税にみんな否定的な意見を言っており、税とは国民が頑張って働いたお金を奪うことだというイメージがあったからだ。その考えと祖父の言葉はあまりに対照的で、私は税について知りたくなった。祖父は週に三回、人工透析を受けている。その額は一か月で約四十万円。しかし、そのほとんどが税によって補助されているようだ。祖父が倒れたときに、すぐにかけてくれた救急車も、運ばれた病院も、税により補助されていることが分かった。税があるから私は今、こうやって祖父と話すことができているのかもしれない。そう思うと心がしめつけられた。今まで知らなかった税の世界。私はいろいろな所で税に助けられていたのだ。教科書、ワクチン接種、消防、警察、ゴミ収集車、私が好きな公園、私が大好きな学校。どれもこれも土台には「税」があった。私が払っていた税にはちゃんと意味があったんだ。そう思うと、私たち国民はどこかで繋がっているような、支え合っているような気がして嬉しくなった。もちろん、税に対してマイナスな考えを持っている人もいるだろう。だけど、私にとっての税は「ヒーロー」だ。だって、影で誰かの笑顔を守り、誰かの安全を守っている。そして、私に物事を多様な角度で見ることの大切さまで教えてくれたのだから。

「いってきます。」

制服姿の私はそうやってドアを開ける。私が歩く道路は緑であふれている。点滅している信号機に急がされるのが私の日課だ。整備された道路で見回りのパトカーと通りすぎる。私が敬礼をすると警察官も返してくれる。気持ち良いそよ風に吹かれる私の表情は、もちろん笑顔だ。